The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	シェーカーの家具の今日的意義 : デザイン史上の位置づけ
Author(s)	石川, 義宗
Citation	デザイン理論. 2008, 53, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53352
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

シェーカーの家具の今日的意義　デザイン史上の位置づけ

石川義宗／東洋美術学校

１．序　　論

本発表の目的は，主に19世紀のアメリカにおいて作られたシェーカー教徒の家具について，現代における重要性を歴史的に明らかにすることである。この目的のため，彼らのデザインが２つのデザイン理論によって見直されたことに焦点を当てる。１つは，機能主義によってシェーカーのデザインが見直されたことである。1935年，シェーカーの家具を紹介する世界初の展覧会がウィットニー美術館で催された。本発表は同展覧会以降のカタログ等を収集，精査し，19世紀の工芸品であるシェーカーの家具が20世紀のデザイン理論によって各地に知られることとなった経緯，および，その論述の変化を明らかにする。もう１つは，機能主義批判を基盤としたデザイン理論によってシェーカーのデザインの重要性が指摘されたことである。ヴィクター・パパネックは著書『地球のためのデザイン』において「美の機能」としてシェーカーのデザインに関する論述を残した。1999年に彼が死去したのち，その理論の発展は途絶えたままとなっているが，本発表はパパネックの最初の著書『生きのびるためのデザイン』から彼のデザイン理論を整理し，シェーカーのデザインに注目するに至った論拠を浮き彫りにしながら，理論の発展を試みる。

２．機能主義の発見

ウィットニー美術館の展覧会カタログ『Shaker handicrafts』の執筆者であるエドワード・デミング・アンドリュースは，シェーカーの文書から実用性と美に関する信仰が機能主義と類似したものであることを指摘した。彼の論述は1930年代当時の機能主義の思潮を反映していたが，その指摘はホレーショ・グリーノウのような19世紀のアメリカの美学に依拠していると考えられる。例えば，グリーノウは美を機能の約束として捉えたが，アンドリュースによる機能主義の発見はシェーカーの家具における美と実用性の調和的な様相を通じて論述されている。それから推察されるように，アンドリュースの論述は20世紀のデザイン理論によってシェーカーの家具を振り返るとともに，自国の伝統が20世紀の理論と同様の論理性に逸早く気付き，それを実現していたことを指摘するものだったといえる。この時点において，シェーカーの家具に与えられたデザイン史上の位置づけは，自国の伝統の先見性を示唆することである。

しかし，ヨーロッパや日本にシェーカーの家具が紹介されたとき，この位置づけに僅かな変化が生じていた。ここで注目すべきはドイツのミュンヘンで開かれた展覧会のカタログである。このカタログを執筆したカール・マンクの論述には機能主義の指摘があり，アンドリュースの踏襲が見られるものの，アンドリュースとマンクの論述は必ずしも一貫していない。先述したように，アンドリュースによる機能主義の発見は美と実用性の調和的な様相において遂げられたものだったが，マンクは機能主義を美と分離的に論述しており，機能主義そのものの論理性が異なっている。例えば，エドワード・R・デ・ザーコは著書『機能主義理論の系譜』において機能主義がドイツでは新即物主義と同意義となり，効用性と適合性の問題を重視しつつ，時として美

を包含しないことを指摘しているが，マンクが機能主義と美を分離的に論述したことはそのようなドイツにおける知的慣習が関係していることに注意が必要であろう。マンクの論述はオランダや日本にも紹介された。日本では建築雑誌『ＳＤ』が彼の論述を引用したものの，日本初の展覧会を開いたセゾン美術館のカタログでは機能主義からミニマリズムとしての見直しが行われた。この点から推察されるように，シェーカーの家具の意義は機能主義理論の再解釈を受けて一定ではなく，その比喩性は今後も変化すると考えられる。

３．機能主義批判の眼差し

「美の機能」としてパパネックがシェーカーの家具に向けた眼差しは，実用性と美の調和的な様相に向けられており，その点ではアンドリュースと同調する。しかし，周知のとおり，パパネックは機能主義に批判的であり，両者の指摘を同一のものとして捉えることは早計であろう。パパネックはデザインを「人間の活動の基礎」として綜合的に思考したが，彼のように機能主義を批判し，かつ，「人間の活動の基礎」として生活における広域性を保持したデザイン理論は，20世紀のデザイン史上に幾つかの例が散見される。それゆえ，パパネックの論述の先鞭は機能主義を批判した同時代のデザイン理論との共鳴によって位置づけられると推定される。このようなデザイン史上の位置づけは，アメリカの美学に依拠したアンドリュースの論述とは異なる。

機能主義への批判，および，生活における広域性というデザイン理論の先鞭として本発表が注目した理論が，『生きのびるためのデザイン』よりも15年前に発表されたドイツ工作連盟の機関誌『Werk und Zeit』におけるマックス・ビルの論文である。この論文においてビルは「美的機能」という理論を発表した。ビルの「美的機能」とパパネックの「美の機能」からは理論的な共通点が幾つか読み取れる。向井周太郎の研究を参照すると，「美の機能」は美と機能に関わる５つの論点を持っているが，ビルはそのなかで「〈美＝形態〉，〈美＝機能〉」という図式を示し，形態，機能，美が等しいことを指摘した。美が形態と機能に同質であるため，この関係が成立しているのである。それゆえ，ビルのデザイン理論は美を主体とした同質的関係を指摘するものだったといえる。ビルの「美的機能」とパパネックの「美の機能」は，実用性と美という平易な理論的骨格を共有しており，「美の機能」はそのような理論の歴史的な一貫性によって導かれている。

４．結　　論

アンドリュースの機能主義の発見は今日に至る機能主義理論の変化において論述されるが，パパネックによる「美の機能」は機能主義と対置したデザイン理論の一貫性において論述されるものである。この点において，シェーカーの家具に与えられたデザイン理論における両義性が明らかとなる。これがシェーカーの家具の今日的意義である。

参考文献

（本文中に著書名のないものに限る）

Andrews, Edward Deming, Shaker furniture, Dover Publications, Inc., 1937

Greenough, Horatio. Small, Harold A., ed. Form and Function, University of California Press 1947

向井周太郎「マックス・ビル」『現代デザイン理論のエッセンス』勝見勝監修，ペリカン社，1966年